

報恩記

芥川龍之介

青空文庫

あまかわじんない
阿媽港甚内の話

わたしは甚内じんないと云うものです。苗字みょうじは——さあ、世間ではずっと前から、阿媽港あまかわじんない甚内じんないと云っているようです。阿媽港甚内、——あなたもこの名は知っていますか？ いや、驚くには及びません。わたしはあなたの知っている通り、評判の高い盗人ぬすびとです。しかし今夜参つたのは、盗みにはいったのではありません。どうかそれだけは安心して下さい。

あなたは日本にほんにいる伴天連ばてれんの中でも、道德の高い人だと聞いています。して見れば盗人と名のついたものと、しばらくでも一しよにいと云う事は、愉快ではないかも知れません。が、わたしも思いのほか、盗みばかりしてもいけないのです。いつぞや聚楽じゅらくの御殿ごてんへ召された呂宋助左衛門るそんすけえもんの手代てだいの一人も、確か甚内と名乗っていました。また利休居士りきゅうこじの珍ちん重ちゆうちゆうしていた「赤がしら」と称える水さしも、それを贈った連歌師れんがしの本名ほんみょうは、甚内じんないとか云つたと聞いています。そう云えばつい二三年前、阿媽港日記あまかわにつぎと云う本を書いた、大村おおむらあたりの通辞つうじの名前も、甚内と云うのではなかったでしょう？ そのほか三

んじょうがわら
条河原の喧嘩に、甲比丹「まるでなど」を救った虚無僧、塚の妙国寺門前に、南
蛮の薬を売っていた商人、……そう云うものも名前を明かせば、何が甚内だったのに
違いありません。いや、それよりも大事なものは、去年この「さん・ふらんしすこ」の御寺
へ、おん母「まりや」の爪を収めた、黄金の舍利塔を献じているのも、やはり甚内と
云う信徒だった筈です。

しかし今夜は残念ながら、一々そう云う行状を話している暇はありません。ただどうか
阿媽港甚内、は、世間一般の人間と余り変りのない事を信じて下さい。そうですか？ で
は出来るだけ手短かに、わたしの用向きを述べる事にしましょう。わたしはある男の魂の
ために、「みさ」の御祈りを願いに来たのです。いや、わたしの血縁のものではありません
ん。と云つてもまたわたしの刃金に、血を塗ったものでもないのです。名前ですか？ 名
前は、——さあ、それは明かして好いかどうか、わたしにも判断はつきません。ある男の
魂のために、——あるいは「ぼうろ」と云う日本人のために、冥福を祈ってやりたいの
です。いけませんか？——なるほど阿媽港甚内に、こう云う事を頼まれたのでは、手輕に
受合う気にもなれますまい。ではとにかく一通り、事情だけは話して見る事にしましょう。
しかしそれには生死を問わず、他言しない約束が必要です。あなたはその胸の十字架に懸

けても、きつと約束を守りますか？ いや、——失礼は赦して下さい。（微笑）伴天連の
 あなたを疑うのは、盗人のわたしには僭上でしよう。しかしこの約束を守らなければ、
 （突然真面目に）「いんへるの」の猛火に焼かれずとも、現世に罰が下る筈です。
 もう二年あまり以前の話ですが、ちようどある夙の真夜中です。わたしは雲水に姿を
 変えながら、京の町中をうろついていました。京の町中をうろついていたのは、その夜に始
 まったではありません。もうかれこれ五日ばかり、いつも初更を過ぎさえすれば、必
 ず人目に立たないように、そつと家々を窺つたのです。勿論何のためだったかは、註を入
 れるにも及びますまい。殊にその頃は摩利伽へでも、一時渡っているつもりでしたから、
 余計に金の入用もあつたのです。

町は勿論とうの昔に人通りを絶てていましたが、星ばかりきらめいた空中には、小やみ
 もない風の音がどよめいています。わたしは暗い軒通いに、小川通りを下つて来ると、
 ふと辻を一つ曲つた所に、大きい角屋敷のあるのを見つけました。これは京でも名を知
 られた、北条屋弥三右衛門の本宅です。同じ渡海を渡世にしても、北条屋は到底角
 倉などと肩を並べる事は出来ずまい。しかしとにかく沙室や呂宋へ、船の一二艘も
 出しているのですから、一かどの分限者には違いありません。わたしは何もこの家を目

当に、うろついていたのではないのですが、ちょうどそこへ来合わせたのを幸い、ひとかせ稼かせぎする気を起しました。その上前にも云つた通り、夜よは深いし風も出ている、——わたしうしろの商売にとりかかるのには、万事持つて来いの寸法すんぽうです。わたしは路ばたの天水桶てんすいおけのうしろ後に、網代あじろの笠や杖を隠した上、たちまち高塀を乗り越えました。

世間の噂うわさを聞いて御覧なさい。阿媽港あまかわじんない甚内はは、忍術を使う、——誰でも皆そう云つています。しかしあなたは俗人のように、そんな事は本當と思えますまい。わたしは忍術も使わなければ、悪魔も味方にはしていません。ただ阿媽港あまかわにいた時分、葡萄牙ポルトガルの船の医者いしやに、究理くうりの学問がくもんを教おしわりしました。それを実地じつちに役立やくたてさえすれば、大きい錠前じやうぜんをねじ切きつたり、重かんぬきい門かどを外はずしたりするのは、格別かくべつむずかしい事ではありませぬ。(微笑)今いままでにない盗ぬすみの仕方、——それも日本にっぽんと云う未開みかいの土地は、十字架や鉄砲の渡来わたくと同様どうようやはり西洋せいやうに教おしわつたのです。

わたしは一ひとときとたたない内に、北条屋きたじょうやの家うちの中なかにはいつていました。が、暗くらい廊下ろうかをつき当あたると、驚おどろいた事にはこの夜更よふかけにも、まだ火影ほかげのさしているばかりか、話わし声こゑのすこがらしる小座敷こざしきがあります。それがあたりの容子ようすでは、どうしても茶室ちやしつに違ちがいありません。「こがらし困こまらしの茶ちやか」——わたしはそう苦く笑しょうしながら、そつとそこへ忍しのび寄よりました。實際じつじその時ときは

人声のするのに、仕事の邪魔を思うよりも、数寄を凝らした囲いの中に、この家の主人や客に來た仲間が、どんな風流を楽しんでいるか？——そんな事に心が惹かれたのです。

襖の外に身を寄せるが早いのか、わたしの耳には思った通り、釜のたぎりがはまりました。が、その音がすると同時に、意外にも誰か話をしては、泣いている声が聞えるのです。誰か、——と云うよりもそれは二度と聞かずに、女だと云う事さえわかりました。こう云う大家の茶座敷に、真夜中女の泣いていると云うのは、どうせただ事ではありません。わたしは息をひそめたまま、幸い明いていた襖の隙から、茶室の中を覗きこみました。

行燈の光に照された、古色紙らしい床の懸け物、懸け花入の霜菊の花。——囲い

の中には御約束通り、物寂びた趣が漂っていました。その床の前、——ちようどわたしの真正面に坐った老人は、主人の弥三右衛門でしょう、何か細かい唐草の羽織に、じつと両腕を組んだまま、ほとんどよそ眼に見たのでは、釜の煮え音でも聞いているようです。弥三右衛門の下座には、品の好い筭、鬻の老女が一人、これは横顔を見せたまま、時々涙を拭っていました。

「いくら不自由がないようでも、やはり苦勞だけはあると見える。」——わたしはそう思いながら、自然と微笑を洩らしたものです。微笑を、——こう云ってもそれは北条屋夫

婦に、悪意があつたのではありません。わたしのように四十年間、悪名ばかり負つて
いるものには、他人の、——殊に幸福らしい他人の不幸は、自然と微笑を浮ばせるのです。
(残酷な表情) その時もわたしは夫婦の歎きが、歌舞伎を見るように愉快だったので。
(皮肉な微笑) しかしこれはわたし一人に、限つた事ではありません。誰にも好まれる
草紙そうしと云えば、悲しい話にきまつています。誰にも好まれる

弥三右衛門はしばらくの後、吐息といきをするようにこう云いました。

「もうこの羽目はめになつた上は、泣いても喚わめいても取返しはつかない。わたしは明日あすにも店
のものに、暇ひまをやる事に決心をした。」

その時また烈しい風が、どつと茶室を揺ゆすぶりしました。それに声が紛まぎれたのでしよう。
弥三右衛門の内儀ないぎの言葉は、何と云つたのだからわかりません。が、主人は領うなずきながら、両
手を膝の上に組み合せると、網代あしろの天井へ眼を上げました。太い眉まゆ、尖つた頬骨ほおほね、殊に
切れの長い目尻、——これは確かに見れば見るほど、いつか一度は会つてゐる顔です。

「おん主あるじ、『えす・きりすと』様。何とぞ我々夫婦の心に、あなた様の御力を御恵み下さ
い。……」

弥三右衛門は眼を閉じたまま、御祈りの言葉を呟つぶやき始めました。老女もやはり夫のよう

に天帝の加護を乞うているようです。わたしはその間瞬きもせず、弥三右衛門の顔を見続けました。するとまた凧の渡った時、わたしの心に閃いたのは、二十年以前の記憶です。わたしはこの記憶の中に、はつきり弥三右衛門の姿を捉えました。

その二十年以前の記憶と云うのは、——いや、それは話すには及びますまい。ただ手短に事実だけ云えば、わたしは阿媽港に渡っていた時、ある日本の船頭に危い命を助けて貰いました。その時は互に名乗りもせず、それなり別れてしまいました。今わたしの見た弥三右衛門は、当年の船頭に違いないのです。わたしは奇遇に驚きながら、やはりこの老人の顔を見守っていました。そう云えば威かつい肩のあたりや、指節の太い手の恰好には、未だ珊瑚礁の潮けむりや、白檀山の匂いがしみているようです。

弥三右衛門は長い御祈りを終ると、静かに老女へこう云いました。

「跡はただ何事も、天主の御意次第と思うたが好い。——では釜のたぎっているのを幸い、茶でも一つ立てて貰おうか？」

しかし老女は今更のように、こみ上げる涙を堪えるように、消え入りそうな返事をしました。

「はい。——それでもまだ悔やしいのは、——」

「さあ、それが愚痴ぐちと云うものじや。北条丸ほうじょうまるの沈しずんだのも、抛なげ銀ぎんの皆倒れたのも、

「いえ、そんな事ではございません。せめては碎せがれの弥三郎やさぶろうでも、いてくれればと思うの
でございますが、……」

わたしはこの話を聞いている内に、もう一度微笑が浮んで来ました。が、今度は北条屋うやの不運に、愉快を感じたではありません。「昔の恩を返す時が来た」——そう思う事が嬉しかったのです。わたしにも、御尋ね者の阿媽港あまかわじんない甚内しんないにも、立派りつぱに恩返しが出来る愉快さは、——いや、この愉快さを知るものは、わたしのほかにはありますまい。（皮肉に）世間の善人は可哀そうです。何一つ悪事を働かない代りに、どのくらい善行ほどこを施した時には、嬉しい心もちになるものか、——そんな事も碌ろくには知らないのですから。

「何、ああ云う人でなしは、居らぬだけにまだしも仕合せなぐらいじや。……」

弥三右衛門は苦にが々にがしにがそうに、行燈あんどんへ眼まなこを外そらせました。

「あいつが使いおつた金でもあれば、今度も急場だけは凌しのげたかも知れぬ。それを思えば
勘当かんとしたのは、……」

弥三右衛門はこう云つたなり、驚いたようにわたしを眺めました。これは驚いたのも無

理はありません。わたしはその時声もかけずに、堺の襖を明けたのですから。——しかもわたしの身なりと云えば、雲水に姿をやつした上、網代の笠を脱いだ代りに、南蛮頭中をかぶっていたのですから。

「誰だ、おぬしは？」

弥三右衛門は年はとつていても、咄嗟に膝を起しました。

「いや、御驚きになるには及びません。わたしは阿媽港甚内と云うものです。——まあ、御静かになすつて下さい。阿媽港甚内は盗人ですが、今夜突然参上したのは、少しほかにも訣があるのです。——」

わたしは頭巾を脱ぎながら、弥三右衛門の前に坐りました。

その後の事は話さずとも、あなたには推察出来るでしょう。わたしは北条屋の危急を救うために、三日と云う日限を一日も違えず、六千貫の金を調達する、恩返し約束を結んだのです。——おや、誰か戸の外に、足音が聞えるではありませんか？ では今夜は御免下さい。いずれ明日か明後日の夜、もう一度ここへ忍んで来ます。あの大十字架の星の光は阿媽港の空には輝いていても、日本の空には見られません。わたしもちょうどああ云うように日本では姿を晦ませていないと、今夜「みさ」を願いに来た、「ぼうろ」の

魂のためにもすまないのです。

何、わたしの逃げ途ですか？ そんな事は心配に及びません。この高い天窓からでも、あの大きい暖炉からでも、自由自在に出て行かれます。ついてはどうか呉々も、恩人「ぼうろ」の魂のために、一切他言は慎んで下さい。

北条屋弥三右衛門の話

伴天連様。どうかわたしの懺悔を御聞き下さい。御承知でも御座いませうが、この頃世上に噂の高い、阿媽港甚内と云う盗人がございます。根来寺の塔に住んでいたのも、殺生関白の太刀を盗んだのも、また遠い海の外では、呂宋の太守を襲つたのも、皆あの男だとか聞き及びました。それがとうとう搦めとられた上、今度一条戻り橋のほとりに、曝し首になつたと云う事も、あるいは御耳にはいつて居りませう。わたしはあの阿媽港甚内に一方ならぬ大恩を蒙りました。が、また大恩を蒙つただけに、ただ今では何とも申しようのない、悲しい目にも遇つたのでございます。どうかその仔細を御聞きの上、罪びと北条屋弥三右衛門にも、天帝の御愛憐を御祈り下さい。

ちようど今から二年ばかり以前の、冬の事でございませぬ。ずつとしけばかり続いたために、持ち船の北条丸は沈みますし、抛げ銀は皆倒れますし、——それやこれやの重なった揚句、北条屋一家は分散のほかには、仕方のない羽目になつてしまいました。御承知の通り町人には取引き先はございませぬ、友だちと申すものはございませぬ。こうなればもう我々の家業は、うず潮に吸われた大船も同様、まつ逆さまに奈落の底へ、落ちこむばかりなのでございませぬ。するとある夜、——今でもこの夜の事は忘れませぬ。ある冨の烈しい夜でございませぬが、わたし共夫婦は御存知の冨に、夜の更けるのも知らず話して居りました。そこへ突然はいつて参つたのは、雲水の姿に南蛮頭巾をかぶつた、あの阿媽港甚内、でございませぬ。わたしは勿論驚きもすれば、また怒りも致しました。が、甚内の話を聞いて見ますと、あの男はやはり盗みを働きに、わたしの宅へ忍びこみました。が、茶室には未だ火影ばかりか、人の話し声が聞えている、そこで襖越しに、覗いて見ると、この北条屋弥三右衛門は、甚内の命を助けた事のある、二十年以前の恩人だつたと、こう云う次第ではございませぬか？

なるほどそう云われて見れば、かれこれ二十年にもなりましようか、まだわたしが阿媽港通いの「ふすた」船の船頭を致していた頃、あそこへ船がかりをしている内に、髭さえ

碌ろくにない日本人を一人、助けてやった事がございます。何でもその時の話では、ふとした酒けんかの上の喧嘩から、唐人とうじんを一人殺したために、追手おつてがかかったとか申して居りました。して見ればそれが今日こんにちでは、あの阿媽港甚内と云う、名代なだいの盗人ぬすびとになったのでございましょう。わたしはとにかく甚内の言葉も嘘ではない事がわかりましたから、一家のものの寝ているのを幸い、まずその用向きを尋ねて見ました。

すると甚内の申しますには、あの男の力に及ぶ事なら、二十年以前の恩返しに、北条屋の危急を救つてやりたい、差さ当りあた入用いりようの金子きんすの高は、どのくらいだと尋ねるのでございます。わたしは思わず苦笑くしやう致いたしました。盗人に金を調達して貰う、——それが可笑おかしいばかりではございません。いかに阿媽港甚内でも、そう云う金があるくらいならば、何もわざわざわたしの宅へ、盗みにはいるにも当りますまい。しかしその金高きんだかを申しますと、甚内は小首こくびを傾けながら、今夜の内にはむずかしいが、三日も待てば調達しよう、無造作むぞうさに引き受けたのでございます。が、何しろ入用なのは、六千貫と云う大金でございまずから、きつと調達出来るかどうか、当あてになるものではございません。いや、わたしの量りょうけん見けんでは、まず賽さいの目をたのむよりも、覚おぼつか束つかないと覚悟をきめていました。

甚内はその夜よわたしの家内に、悠々と茶なぞ立てさせた上、凧こがらしの中を帰って行きました。

が、その翌日になって見ても、約束の金は届きません。二日目も同様でございました。三日目は、——この日は雪になりましたが、やはり夜に入ってしまった後も、何一つ便りはありません。わたしは前に甚内の約束は、当にして居らぬと申し上げました。が、店のものにも暇を出さず、成行きに任せていた所を見ると、それでも幾分か心待ちには、待つていたのでございましょう。また實際三日目の夜には、囲いの行燈に向つていても、雪折れの音のする度毎に、聞き耳ばかり立てて居りました。

所が三更も過ぎた時分、突然茶室の外の庭に、何か人の組み合うらしい物音が聞えるではございませんか？ わたしの心に閃いたのは、勿論甚内の身の上でございます。もしや捕り手でもかかったのではないか？——わたしは咄嗟にこう思いましたから、庭に向いた障子を明けるが早いか、行燈の火を掲げて見ました。雪の深い茶室の前には、大明竹の垂れ伏したあたりに、誰か二人掴み合っている——と思うとその一人は、飛びかかる相手を突き放したなり、庭木の陰をくぐるように、たちまち塀の方へ逃げ出しました。雪のはだれる音、塀に攀じ登る音、——それぎりひっそりしてしまつたのは、もうどこか塀の外へ、無事に落ち延びたのでございましょう。が、突き放された相手の一人は、格別跡を追おうともせず、体の雪を払いながら、静かにわたしの前へ歩み寄りしました。

「わたしです。阿媽港甚内、ですよ。」

わたしは呆氣にとられたまま、甚内の姿を見守りました。甚内は今夜も南蛮頭巾に、袈裟法衣を着ているのでございます。

「いや、とんだ騒ぎをしました。誰もあの組打ちの音に、眼を覚さねば仕合せですが。」
甚内は困いへはいると同時に、ちらりと苦笑を洩らしました。

「何、わたしが忍んで来ると、ちようど誰かこの床の下へ、這いこもうとするものがあるのです。そこで一つ手捕りにした上、顔を見てやろうと思つたのですが、とうとう逃げられてしまいました。」

わたしはまださっきの通り、捕り手の心配がございましたから、役人ではないかと尋ねて見ました。が、甚内は役人どころか、盗人だと申すのでございます。盗人が盗人を捉えようとした、——このくらい珍しい事はございますまい。今度は甚内よりもわたしの顔に、自然と苦笑が浮びました。しかしそれはともかくも、調達の成否を聞かない内は、わたしの心も安まりません。すると甚内は云わない先に、わたしの心を読んだのでございましょう、悠々と胸巻をほどこしながら、炉の前へ金包みを並べました。

「御安心なさい、六千貫の工面はつきましたから。——実はもう昨日の内に、大抵調達

したのですが、まだ二百貫ほど不足でしたから、今夜はそれを持って来ました。どうかこの包みを受け取って下さい。また昨日までに集めた金は、あなた方御夫婦も知らない内に、この茶室の床下へ隠して置きました。大方今夜の盗人のやつも、その金を嗅ぎつけて来たのでしよう。」

わたしは夢でも見ているように、そう云う言葉を聞いていました。盗人に金を施して貰う、——それはあなたに伺わないでも、確かに善い事ではございますまい。しかし調達が出来るかどうか、半信半疑の境にいた時は、善悪も考えずに居りましたし、また今となつて見れば、むげに受け取らぬとも申されません。しかもその金を受け取らないとなれば、わたしばかりか一家のものも、路頭に迷うのでございます。どうかこの心もちに、せめては御憐憫を御加え下さい。わたしはいつか甚内の前に、恭しく両手をついたまま、何も申さずに泣いて居りました。……

その後わたしは二年の間、甚内の噂を聞かずに居りました。が、とうとう分散もせずにつつが恙ないその日を送られるのは、皆甚内の御蔭でございますから、いつでもあの男の仕合せのために、人知れずおん母「まりや」様へも、祈願をこめていたのでございます。ところがどうでございましょう、この頃往來の話の聞けば、阿媽港甚内は御召捕りの上、戻

り橋に首を曝していると、こう申すではございませんか？ わたくしは驚きも致しました。人知れず涙も落しました。しかし積悪の報と思えば、これも致し方はございますまい。いや、むしろこの永年、天罰も受けずに居りましたのは、不思議だったくらいでございます。が、せめてもの恩返しに、陰ながら回向をしてやりたい。——こう思ったものでございすから、わたしは今日伴もつれずに、早速一条戻り橋へ、その曝し首を見に参りました。戻り橋のほとりへ参りますと、もうその首を曝した前には、大勢人がたかつて居ります。罪状を記した白木の札、首の番をする下役人——それはいつもと変りません。が、三本組み合せた、青竹の上に載せてある首は、——ああ、そのむごたらしい血まみれの首は、どうしたと云うのでございましょう？ わたしは騒々しい人だかりの中に、蒼ざめた首を見るが早いか、思わず立ちすくんでしまいました。この首はあの男ではございません。阿媽港甚内の首ではございません。この太い眉、この突き出た頬、この眉間の刀創、——何一つ甚内には似て居りません。しかし、——わたしは突然日の光も、わたしのまわりの人だかりも、竹の上に載せた曝し首も、皆どこか遠い世界へ、流れてしまったかと思うくらい、烈しい驚きに襲われました。この首は甚内ではございません。わたしの首でございす。二十年以前のわたし、——ちようど甚内の命を助けた、その頃のわたし

でございます。「弥三郎！」——わたしは舌さえ動かさせたなら、こう叫んでいたかも知れません。が、声を揚げるどころかわたしの体は瘡を病んだように、震えているばかりでございました。

弥三郎！ わたしはただ幻のように、倅の曝し首を眺めました。首はやや仰向いたまま半ば開いた眶の下から、じつとわたしを見守って居ります。これはどうした訣でございましょう？ 倅は何かの間違いから、甚内と思われたのでございましょうか？ しかし御吟味も受けたとすれば、そう云う間違いは起りますまい。それとも阿媽港甚内というのは、倅だったのでございましょうか？ わたしの宅へ来た麿雲水は、誰か甚内の名前を仮りた、別人だったのでございましょうか？ いや、そんな筈はございません。三日と云う日限を一日も違えず、六千貫の金を工面するものは、この広い日本の国にも、甚内のほかに誰が居りましょう？ して見ると、——その時わたしの心の中には、二年以前雪の降った夜、甚内と庭に争っていた、誰とも知らぬ男の姿が、急にはつきり浮んで参りました。あの男は誰だったのでございましょう？ もしや倅ではございますまいか？ そう云えばあの男の姿かたちは、ちらりと一目見ただけでも、どうやら倅の弥三郎に、似ていたようでもございます。しかしこれはわたし一人の、心の迷いでございましょうか？ もし倅だ

つたとすれば、——わたしは夢の覚めたように、しげじげ首を眺めました。するとその紫ばんだ、妙に緊りのない唇には、何か微笑に近い物が、ほんのり残っているのをごさいます。

曝し首に微笑が残っている、——あなたはそんな事を御聞きになると、御晒いになるかも知れません。わたしさえそれに気のついた時には、眼のせいかとも思いました。が、何度見直しても、その干からびた唇には、確かに微笑らしい明みが、漂っているのをごさいます。わたしはこの不思議な微笑に、永い間見入って居りました。と、いつかわたしの顔にも、やはり微笑が浮んで参りました。しかし微笑が浮ぶと同時に、眼には自然と熱い涙も、にじみ出して来たのでございます。

「お父さん、勘忍して下さい。——」

その微笑は無言の内に、こう申していたのでございます。

「お父さん。不孝の罪は勘忍して下さい。わたしは二年以前の雪の夜、勘当の御詫びがしたいばかりに、そつと家へ忍んで行きました。昼間は店のものに見られるのさえ、恥しいなりをしていましたから、わざわざ夜の更けるのを待った上、お父さんの寝間の戸を叩いても、御眼にかかるつもりでいたのです。ところがふと囲いの障子に、火影のさしてい

るのを幸い、そこへ怯おず怯おず行きかけると、いきなり誰か後うしろから、言葉もかけずに組つきました。

「お父さん。それから先はどうなつたか、あなたの知つている通りです。わたしは余り不意だつたため、お父さんの姿を見るが早いか、相手の曲くせ者ものを突き放したなり、高堀たかべいの外へ逃げてしまいました。が、雪明ゆきあかりに見た相手の姿は、不思議にも雲水うんすいのようでしたから、誰も追う者のないのを確かめた後のち、もう一度あの茶室の外へ、大胆だいたんにも忍んで行つたのです。わたしは囲いの障子越しに、一切いっさいの話を立ち聞きました。

「お父さん。北条屋ほうじょうやを救つた甚内じんないは、わたしたち一家の恩人です。わたしは甚内の身に危急ききゆうがあれば、たとえ命は抛なげつても、恩に報いたいと決心しました。またこの恩を返す事は、勘当を受けた浮浪人ふろうにんのわたしでなければ出来ずまい。わたしはこの二年間、そう云う機会を待つていました。そうして、——その機会が来たのです。どうか不孝の罪は勘忍して下さい。わたしは極道ごくどうに生れましたが、一家の大恩だけは返しました。それがせめてもの心やりです。……」

わたしは宅へ帰る途中も、同時に泣いたり笑つたりしながら、倅せがれのけなげさを褒めてやりました。あなたは御存知になりますまいが、倅せがれの弥三郎やさぶろうもわたしと同様、御宗門ごしゅうもんに

帰依きえして居りましたから、もとは「ぼうろ」と云う名前さえも、頂いて居ったものでございます。しかし、——しかし倅も不運なやつでございました。いや、倅ばかりではございません。わたしもあの阿媽港あまかわけ甚内じんないに一家の没落さえ救われなければ、こんな嘆きは致しますまいに。いくら未練みれんだと思いましたが、こればかりは切せつのうございませぬ。分散せずいた方が好よいか、倅を殺さずに置いた方が好よいか、——（突然苦しそうに）どうかわたしを御救い下さい。わたしはこのまま生きていければ、大恩人の甚内を憎むようになるかも知れません。……………（永い間あいだの歎すすりなき 歎すすりなき）

「ぼうろ」弥三郎の話

ああ、おん母「まりや」様！ わたしは夜よが明け次第、首を打たれる事になっています。わたしの首は地に落ちて、わたしの魂たましいは小鳥のように、あなたの御側へ飛んで行くでしょう。いや、悪事ばかり働いたわたしは、「はらいそ」（天国）の莊しやうごん 巖いんを拝する代りに、恐しい「いんへるの」（地獄）の猛火の底へ、逆落さかおとしになるかも知れません。しかしわたしは満足です。わたしの心には二十年来、このくらい嬉しい心もちは、宿った事が

ないのです。

わたしは北条屋弥三郎です。が、わたしの曝し首は、阿媽港甚内と呼ばれるでし

よう。わたしがあの阿媽港甚内、——これほど愉快な事があるでしょうか？ 阿媽港甚内、

——どうです？ 好い名前ではありませんか？ わたしはその名前を口にするだけでも、

この暗い牢の中さえ、天上の薔薇や百合の花に、満ち渡るような心もちがします。

忘れもしない二年前の冬、ちようどある大雪の夜です。わたしは博奕の元手が欲しさに、

父の本宅へ忍びこみました。ところがまだ囲いの障子に、火影がさしていましたから、

そつとそこを窺おうとすると、いきなり誰か言葉もかけず、わたしの襟上を捉えたもの

があります。振り払う、また掴みかかる、——相手は誰だか知らないのですが、その力の

逞しい事は、到底ただものとは思われません。のみならず二三度揉み合う内に、茶室の障

子が明いたと思うと、庭へ行燈をさし出したのは、紛れもない父の弥三右衛門です。わ

たしは一生懸命に、掴まれた胸倉を振り切りながら、高塀の外へ逃げ出しました。

しかし半町ほど逃げ延びると、わたしはある軒下に隠れながら、往来の前後を見

廻しました。往来には夜目にも白々と、時々雪煙りが揚るほかには、どこにも動いてい

るものはありません。相手は諦めてしまったのか、もう追いかけても来ないようです。が、

あの男は何ものでしょう？ 咄嗟の間に見た所では、確かに僧形をしていました。が、

さっきの腕の強さを見れば、——殊に兵法にも精しいのを見れば、世の常の坊主ではありません。第一こう云う大雪の夜に、庭先へ誰か坊主が来ている、——それが不思議ではありませんか？ わたしはしばらく思案した後、たとい危い芸当にしても、とにかくもう一度茶室の外へ、忍び寄る事に決心しました。

それから一時ばかりたつた頃です。あの怪しい行脚の坊主は、ちようど雪の止んだのを幸い、小川通りを下つて行きました。これが阿媽港甚内なのです。侍、連歌師、町人、虚無僧、——何にでも姿を変えると云う、洛中に名高い盗人なのです。わたしは後から見え隠れに甚内の跡をつけて行きました。その時ほど妙に嬉しかった事は、一度もなかつたのに違いありません。阿媽港甚内！ 阿媽港甚内！ わたしはどのくらい夢

の中にも、あの男の姿を慕っていたでしょう。殺生閔白の太刀を盗んだのも甚内です。沙室屋の珊瑚樹を詐つたのも甚内です。備前宰相の伽羅を切つたのも、甲比丹「ペれいら」の時計を奪つたのも、一夜に五つの土蔵を破つたのも、八人の参河侍を斬り倒したのも、——そのほか末代にも伝わるような、稀有の悪事を働いたのは、いつでも阿媽港甚内です。その甚内は今わたしの前に、網代の笠を傾けながら、薄明るい雪路

を歩いている。——こう云う姿を眺められるのは、それだけでも仕合せではありませんか？ が、わたしはこの上にも、もつと仕合せになりたかったのです。

わたしは浄厳寺じようごんじの裏へ来ると、一散いつさんに甚内じんないへ追いつきました。ここはずつと町家ちようかのない土塀どべい続きになっていきますから、たとい昼でも人目を避けるには、一番御誂おあつらえの場所なのですが、甚内はわたしを見ても、格別驚いた気色けしきは見せず、静かにそこへ足を止めました。しかも杖つえをついたなり、わたしの言葉を待つように、一言ひとことも口を利きかないのです。わたしは實際恐る恐る、甚内の前に手をつきました。しかしその落着いた顔を見ると、思うように声さえ出て来ません。

「どうか失礼は御免下さい。わたしは北条屋弥三右衛門ほつじようややそうえもんの倅せがれ弥三郎やさぶろうと申すものです。——」

わたしは顔を火照ほてらせながら、やつとこう口を切りました。

「実は少し御願ごんいがあつて、あなたの跡を慕したつて来たのですが、……」

甚内はただ頷うなずきました。それだけでも気の小さいわたしには、どのくらい難ありがた有い気がしたでしょう。わたしは勇氣も出て来ましたから、やはり雪の中に手をついたなり、父の勘当かんどうを受けている事、今はあぶれものの仲間にはいつている事、今夜父の家うちへ盗みには

いつた所が、計らず甚内にめぐり合った事、なおまた父と甚内との密談も一つ残らず聞いた事、——そんな事を手短に話しました。が、甚内は不相変、黙然と口を噤んだまま、冷やかにわたしを見ています。わたしはその話をしてしまうと、一層膝を進ませながら、甚内の顔を覗きこみました。

「北条一家の蒙った恩は、わたしにもまたかかっています。わたしはその恩を忘れないうしるしに、あなたの手下になる決心をしました。どうかわたしを使って下さい。わたしは盗みも知っています。火をつける術も知っています。そのほか一通りの悪事だけは、人に劣らず知っています。——」

しかし甚内は黙っています。わたしは胸を躍らせながら、いよいよ熱心に説き立てました。

「どうかわたしを使って下さい。わたしは必ず働きます。京、伏見、堺、大阪、——わたしの知らない土地はありません。わたしは一日に十五里歩きます。力も四斗俵は片手に挙げます。人も二三人は殺して見ました。どうかわたしを使って下さい。わたしはあなたのためならば、どんな仕事でもして見せます。伏見の城の白孔雀も、盗めと云えば、盗んで来ます。『さん・ふらんしすこ』の寺の鐘楼も、焼けと云えば焼いて来ます。右大

臣家の姫君も、拐せと云えば拐して来ます。奉行の首も取れと云えば、——」

わたしはこう云いかけた時、いきなり雪の中へ蹴倒されました。

「莫迦め！」

甚内は一声叱つたまま、元の通り歩いて行きそうにします。わたしはほとんど気違いのように法衣の裾へ縋りつきました。

「どうかわたしを使つて下さい。わたしはどんな場合にも、きつとあなたを離れません。あなたのためには水火にも入ります。あの『えそぼ』の話の獅子王さえ、鼠に救われるではありませんか？ わたしはその鼠になります。わたしは、——」

「黙れ。甚内は貴様なぞの恩は受けぬ。」

甚内はわたしを振り放すと、もう一度そこへ蹴倒しました。

「白癩めが！ 親孝行でもしろ！」

わたしは二度目に蹴倒された時、急に口惜しさがこみ上げて来ました。

「よし！ きつと恩になるな！」

しかし甚内は見返りもせず、さつさと雪路を急いで行きます。いつかさし始めた月の光に網代の笠を仄めかせながら、……それぎりわたしは二年の間、ずっと甚内を見ずにい

るのです。（突然笑う）「甚内は貴様なぞの恩は受けぬ」……あの男はこう云いました。しかしわたしは夜の明け次第、甚内の代りに殺されるのです。

ああ、おん母「まりや様！」わたしはこの二年間、甚内の恩を返したさに、どのくらい苦しんだか知れませんか。恩を返したさに？——いや、恩と云うよりも、むしろ恨を返したさにです。しかし甚内はどこにいるか？ 甚内は何をしているか？——誰にそれがわかりましょう？ 第一甚内はどんな男か？——それさえ知っているものはありません。わたしが出た賈雲水は四十前後の小男です。が、柳町の廓にいたのは、まだ三十を越えていない、赧ら顔に鬚の生えた、浪人だと云うではありませんか？ 歌舞伎の小屋を擾がしたと云う、腰の曲った紅毛人、妙国寺の財宝を掠めたと云う、前髪の垂れた若侍——そう云うのを皆甚内とすれば、あの男の正体を見分ける事さえ、到底人力には及ばない筈です。そこへわたしは去年の末から、吐血の病に罹ってしまいました。どうか恨みを返してやりたい、——わたしは日毎に痩せ細りながら、その事ばかりを考えていました。するとある夜わたしの心に、突然閃いた一策があります。「まりや」様！「まりや」様！この一策を御教え下さったのは、あなたの御恵みに違いありません。ただわたしの体を捨てる、吐血の病に衰え果てた、骨と皮ばかりの体を捨てる、——それ

だけの覚悟をしさえすれば、わたしの本望は遂げられるのです。わたしはその夜嬉しさの余り、いつまでも独り笑いながら、同じ言葉を繰返していました。——「甚内の身代りに首を打たれる。甚内の身代りに首を打たれる。……」

甚内の身代りに首を打たれる——何とすばらしい事ではありませんか？ そうすれば勿論わたしと一しよに、甚内の罪も亡んでしまう。——甚内は広い日本国中、どこでも大威張りに歩けるのです。その代り（再び笑う）——その代りわたしは一夜の内に、稀代の大賊になれるのです。呂宋助左衛門の手代だったのも、備前宰相の伽羅を切ったのも、利休居士の友だちになったのも、沙室屋の珊瑚樹を詐ったのも、伏見の城の金蔵を破ったのも、八人の参河侍を斬り倒したのも、——ありとあらゆる甚内の名誉は、ことごとくわたしに奪われるのです。（三度笑う）云わば甚内を助けると同時に、甚内の名前を殺してしまふ、一家の恩を返すと同時に、わたしの恨みも返してしまふ、——このくらい愉快な返報はありません。わたしがその夜嬉しさの余り、笑い続けたのも当然です。今でも、——この牢の中でも、これが笑わずにいられるでしょうか？

わたしはこの策を思いついた後、内裏へ盗みにはいりました。宵闇の夜の浅い内ですから、御簾越しに火影がちらついたり、松の中に花だけ仄めいたり、——そんな事も見た

ように覚えています。が、長い廻廊の屋根から、人気のない庭へ飛び下りると、たちまち四五人の警護の侍に、望みの通り搦められました。その時です。わたしを組み伏せた鬚侍は、一生懸命に縄をかけながら、「今度こそは甚内を手捕りにしたぞ」と、呟いていたではありませんか？　そうです。阿媽港甚内のほかに、誰が内裏なぞへ忍びこみましよう？　わたしはこの言葉を聞くと、必死にもがいている間でも、思わず微笑を洩らしたものです。

「甚内は貴様なぞの恩にはならぬ。」——あの男はこう云いました。しかしわたしは夜の明け次第、甚内の代りに殺されるのです。何と云う気味の好い面当てでしょう。わたしは首を曝されたまま、あの男の来るのを待つてやります。甚内はきつとわたしの首に、声のない哄笑を感じるでしょう。「どうだ、弥三郎の恩返しは？」——その哄笑はこう云うのです。「お前はもう甚内では無い。阿媽港甚内はこの首なのだ、あの天下に噂の高い、日本第一の大盗人は！」（笑う）ああ、わたしは愉快です。このくらい愉快に思つた事は、一生にただ一度です。が、もし父の弥三右衛門に、わたしの曝し首を見られた時には、——（苦しそうに）勘忍して下さい。お父さん！　吐血の病に罹つたわたしは、たとい首を打たれずとも、三年とは命は続かないのです。どうか不孝は勘忍して下さい、わ

たしは極道ごくどうに生まれましたが、とにかく一家の恩だけは返す事が出来たのですから、
…
…
…

(大正十一年三月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

報恩記

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>